

年間第9主日

高円寺教会 2011. 3. 6

マタイ 7 : 21～27

今、読まれた朗読箇所は、山上の説教の最後の部分です。自分たちは救いから遠いと思っていた群衆に「心の貧しい者は幸い」と祝福を与えたイエスは、その後、どのように生きるべきかを教えてきました。今日はその結びにあたります。今日は、9時半のミサでの説教は最後ですので、今日の福音書から少しずれるかもしれませんが、「キリスト者の行い」について考えます。

「行い」はとても難しい問題です。教会の伝統の中でも、「救い」のために「行い」が必要なのか？ 「信仰」だけでいいのか？ という論争が繰り広げられました。キリスト教がカトリックとプロテスタントに分かれた原因の一つでもあります。今から振り返ると両方の極端さに問題があったことがわかります。当時のカトリックのように「行い」を重視し過ぎると、以前私が説教でお話しした「良い行い比べ」の世界に入ります。「行い」を積むほど「救い」が得られると考えてしまいます。また、神様ではなく人と比べて自分は「良いか？」か「悪いか？」比べてみたり、結果ばかりを気にします。そうになると、人から認められることが目的になってしまいます。上手くいくと自分の手柄とうぬぼれ、うまくいかない自分は大変な人間で役にも立たないと否定しがちです。要は、頑張っている自分が中心で人からは神様が見えてきません。一方、「信仰のみ」は、今日の福音書にある立場です。その人は頭でイエスの言葉を理解していても、周りの人には天の国が伝わりません。イエスと自分の関わりだけが大事で、周りの人にイエスの愛を伝えることへの意識が向きません。イエスが私たちに与えたい「救い」には、愛の業が切り離せません。私たちは「行い」と「信仰」の両方を大事にしなければなりません。

「天の父の御心」を知ることは簡単には分かりません。イエス自身も祈りを毎日、とてもとても大切にしていました。ユダヤ教の伝統に基づいて、毎日3

回の祈りを欠かしませんでした。詳しくは、昨年8月の信者講座のレジュメを
読んでくださると書いてありますが、日の出、午後3時、日没後、この3つの
時刻にイエスは祈っていました。このような祈りは、今のユダヤ社会でも珍し
いことではありません。当時のイエスはさらに祈っていたでしょう。新約聖書
の中でイエスは「父よ」と170回呼びかけていますが、イエスと御父との絆
は、ほんとに毎日毎日の祈りの積み重ねによって強まりました。だから、イエ
スは「天の父の御心」がどこにあるか分かるようになっていきました。

では、私たちが「天の父の御心」を知るにはどうしたらいいのでしょうか？
イエスの祈りに直接学ぶ方法もありますが、イエスは神様なのでそこまでなか
なか到達しにくいのでは？と感じている方に、「行い」と「信仰」のバランス
をより手軽に取れる方法があります。それは、聖母マリアに倣うことです。こ
こからは、ミサの後の信者講座の前ふり、つまり宣伝です。マリアは、イエス
の受胎のときから十字架上の死に至るまで、いつもイエスのそばにいました。
イエスに祈りを教えた人だし、イエスからも神様の計画がどこにあるのか学ん
だ方です。聖母マリアは、イエスを信じた一番最初の人、最初のクリスチャン
ですから、彼女に倣うことは理にかなっているでしょう。マリアの生涯、イエ
スとどのように関わったかを知って、祈ることは私たちに身近ですし大きな力
を与えてくれます。一つご紹介しますと、マリアの従順、つつましく時に大胆
な態度、出来事を思い巡らす態度、人の苦しみに共感できる態度は、必要な助
けのために心を配る態度はキリスト者の模範です。クリスチャンの「心」が
伴った「行い」とは何か？をマリアは教えてくれます。

私たちは、ある面、イエスが生きた時代よりも難しい時代を生きています。
祈りの時間も取りにくい、何をどう選んだらいいのかわからない。私たちは、
厳しい時代を生きています。それでも、苦しい時に力を出し合って支え合えば
道が開ける。そのことは、私自身の司祭への召出しについても言えます。力不
足や悩みがあっても支え合うことができる。私にとっての高円寺教会は、その
シンボルです。

私たちが、クリスチャンの心をもって「行い」に励むことができるように、
このミサを捧げましょう。

イエズス会司祭 柴田 潔